

1. はじめに

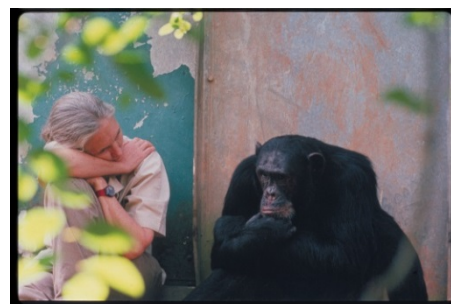
今年度、京都府教育委員会主催の「京の教員特別セミナー」でACOPに出会う機会があり、大変興味あるプログラムと感じた。是非実践してみたいと思い、担任している小学5年生のクラスで実践を試みた。

本校は小規模校であり、クラス在籍児童数は9名である。少人数であることを生かし、常に児童同士、クラス全体の対話による深め合いを進めてきた。これまで図画工作科の鑑賞の授業では自分たちが作成したものをお互いに評価し合うことが中心であった。年に数回教科書などを使って、有名な作品について鑑賞することはあったが、ACOPのように対話しながら鑑賞するというものではなかった。このためACOPが授業改善のために有効な手段となることが期待された。

2. 実践の内容

右の「ジェーン・グドール博士とチンパンジー」と言う作品について教師がナビゲーターを務めながら鑑賞した。手順は次のとおりである。

- ① モニター画面に大きく作品を映し出し、クラス全員で見られるようにした。
- ② 個人個人が直感的に思ったことをワークシートに記入する。
- ③ それぞれが直感的に思ったことを出し合い、クラス全員で対話しながらの鑑賞を行う。
- ④ もう一度、一人ひとりが作品について思うことや考えたことをワークシートにまとめる。



ワークシートについては、児童がそれぞれ個人で鑑賞したときとクラス全員で対話しながら鑑賞したときで、作品に対する思いがどう変わったかを印象付けるレイアウトを考えてみた。

3. 児童の反応

児童が一人で鑑賞したときには、「チンパンジーがさみしそう。」や「飼育員さんは、悩んでいる。」など、博士とチンパンジーを別々に見取る児童が多く、その他にも、「ここは動物園だと思う。」など、短い文章で答えられる内容のものが多かった。

しかし、対話しながらの鑑賞の際に、「飼育員さんは、悩んでいる。」という意見に対して、「どういふところからそう思ったの?」「なんで悩んでいるのかな?」と全体に問い返すことにより、それぞれの思考がつながり、「チンパンジーがさみしそうだから。」「何かあったのかな?」と関わり合いの中で、その背景にあることへの想像を膨らませ、楽しそうに鑑賞することができた。これまでの鑑賞の学習よりも生き生きと、そしてじっくりと作品を鑑賞する児童の姿に喜びを感じた。

4. 最後に

今回の実践を通して、児童は友達と話し合いながら鑑賞することの楽しさを味わうことができたと感じている。後日、校外学習で大阪市にある国際美術館を訪れたとき、児童が熱心に鑑賞し、絵について話している様子を見ることができた。帰り際には「もっと時間があればよかったのに!」というほどであった。これも今回の実践の成果だと言っても過言ではない。

今後もACOPの実践を積み重ね、児童が友達とコミュニケーションをとること、美術作品を鑑賞すること、これらを楽しめるようにしていきたい。教師として「子どもたちが生き生きと作品を鑑賞する喜び」を感じることできるACOPという新しい手法に出合えてよかったと感じている。